

令和4年度 奈良県子ども読書活動推進会議 議事要旨

日時 令和4年8月1日(月) 14時～16時

場所 奈良県庁東棟2階 教育委員室

出席者

奈良県教育委員会事務局教育次長(議長)	春田 晋司
奈良県学校図書館協議会 高等学校図書館研究会代表 (奈良県立法隆寺国際高等学校長)	上田 精也
奈良県学校図書館協議会代表代理 奈良県学校図書館協議会 小中学校図書館研究会代表 (香芝市立真美ヶ丘西小学校長)	浅井 信成
奈良県都市教育長協議会代表 (桜井市教育委員会教育長)	上田 陽一
奈良県町村教育長会代表 (川西町教育委員会教育長)	橋本 宗和
民間団体ボランティア代表 (奈良子どもの本連絡会)	西村 君江
学識経験者 (奈良教育大学教授)	棚橋 尚子
奈良県立図書館情報館副館長	井ノ上 晶
奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課長代理 人権・地域教育課主幹	清水 孝則
奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課長	山内 祐司
奈良県教育委員会事務局学ぶ力はぐくみ課長	熊谷 啓子

○奈良県子ども読書活動推進会議設置要綱について

本会議は、「奈良県子ども読書活動推進会議設置要綱」(資料1参照)の第8条により開催する。

○会議の公開について

本会議は、「奈良県子ども読書活動推進会議の公開に関する取扱い」(資料11参照)及び「傍聴要領」(資料12参照)を規定している。この「取扱い」により、会議は原則公開とし、開催に際しては傍聴席を設け、終了後は奈良県ホームページにて議事録を掲載する。

○議長挨拶

○委員紹介

○議事要旨

(1) 令和3年度事業報告について(資料3参照)

①子ども読書活動推進会議について

令和3年度は、8月17日に本会議を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響により急速にGIGAスクール構想が進められた状況下、電子書籍の利用が注目されていることを受け、「令和2年度子どもの読書活動の推進等に関する調査研究」によりまとめられた「電子図書館及び電子書籍を活用した子ども読書活動推進に関する実態調査」を示した。また、子どもの読書活動を推進するための取組を報告いただき、情報交換を行った。読書離れの要因としてスマートフォンの普及などの読書環境の変化、中学生までの読書習慣の形成や子どもに読書を勧める大人の不読の課題、ICT端末の活用と読書活動の両立に対する疑問や、読書習慣によるメディアリテラシーの養成等の意見をいただいた。

②「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業について（資料4参照）

平成24年度から「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業を行っている。昨年は小・中・高あわせて27校、参加者329人から応募があり、10月の審査会で130作品中から20作品を優秀作品として選考し、11月から県内施設での展示等、啓発に活用した。

③子ども読書活動推進講座について（資料5参照）

子ども読書活動推進講座は、図書館関係者・読み聞かせボランティア、教職員等を対象に、講義・演習の形で行っている。昨年度は「子どもの発達段階に応じた読書活動講座」乳幼児向け、小学校1～3年生向け、小学校4～6年生向けの3回の講座を県教育委員会事務局人権・地域教育課主催、県立図書館の共催で開講し、のべ54名の参加があった。

④子ども読書活動推進会議専門部会について（資料6参照）

例年11月に子ども読書活動推進会議の専門部会を開催し、子供の読書活動優秀実践校・図書館・団体に対する文部科学大臣表彰の推薦に関して協議している。昨年度の奈良県からは葛城市立當麻小学校、葛城市立白鳳中学校、県立榛生昇陽高等学校、大淀町立図書館を文部科学省に推薦し、今年3月に文部科学大臣表彰が決定した。子ども読書の日の4月23日に国立オリンピック記念青少年総合センターで表彰式が行われ、葛城市立白鳳中学校と県立榛生昇陽高等学校が出席した。

⑤子ども読書活動推進フォーラムについて（資料7、8参照）

令和3年度奈良県子ども読書活動推進フォーラムを実施した。新型コロナウイルス感染症対策を踏まえ、Zoomでオンライン開催とし、奈良県Webページで資料提供を行った。

(2) 令和4年度事業計画案（資料9参照）

①「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業について

6月から啓発ポスター募集事業を今年度も実施している。現在、県内各学校に募集要項やチラシを配布し、作品を募集しているところ。ポスター審査会は10月中旬に予定しており、奈良県学校図書館協議会代表、奈良県学校図書館協議会高等学校図書館研究会代表、学識経験者、当課の課長及び国語科、美術科担当の指導主事で審査を行う予定である。優秀作品の展示は、県立図書館をはじめ奈良公園バスターミナルや教育研究所等県の各施設、市町村立図書館等において展示する予定である。

②子ども読書活動推進講座について

8月22日には県立教育研究所による教職員を対象とした読み聞かせの実践方法について理解を深め、子供に本の魅力を伝えるための研修講座が企画されている。11月、12月、1月には県教育委員会事務局人権・地域教育課の主催、県立図書館の共催で「発達段階に応じた読書講座」を講義・演習の形で行う予定である。

③子ども読書活動推進会議専門部会について

子ども読書活動推進会議専門部会を文部科学省からの通知に基づき開催する予定である。来年度の文部科学大臣表彰推薦について協議していただく。学校、図書館、団体の3部門の選考をお願いする予定である。

④子ども読書活動推進フォーラムについて

子ども読書活動推進フォーラムについては、今年度は令和5年2月14日の開催を予定している。

⑤令和4年度 読書活動推進事業について

6月から文部科学省委託事業「令和4年度 読書活動推進事業」を進めている。学校図書館の利活用に係る研究成果の普及をすることにより、県内の読書活動の充実を図る。研究指定地域である宇陀市で学校図書館の機能を生かした取組について研究指定校を指定し、研究成果の普及を図る予定である。

(3) 奈良県子ども読書活動の推進について

県における子ども読書活動の推進については、「奈良県子ども読書活動の充実を目指して」に基づいて進めている。新型コロナウイルス感染症の影響によりGIGAスクール構想が急速に進み、子どもたちの学習環境も大きく変わっている。小中学生には一人一台のタブレット端末が整備された。高等学校ではBYODによるICT機器の活用が始まる。このような状況の中、電子書籍の利用が注目されている。国が令和2年度実施した「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」により「電子図書館及び電子書籍を活用した子供読書活動推進に関する実態調査」がまとめられている。予算不足等により公立学校、公立図書館で導入・活用が難しい現状であるが、全国的に少しずつ広がりが見られる。奈良県においても前回調査から新たに2団体での導入があった。引き続き、この電子図書をどのように捉えて子どもの読書活動の推進に組み込んでいくのか、その動向について注視していく。「令和2年度 学校図書館の現状に関する調査」や「全国学力・学習状況調査」等、定期的実施される調査結果を分析的に捉え活用していくことも重要であるとする。国では、令和5年に「第5次 子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の公表を予定している。本年6月、7月には有識者会議が開催され、次期基本計画に向けた検討が始まっている。また、第6次「学校図書館図書整備等5か年計画」が令和4年1月に策定されている。各種調査の分析や、各委員からの意見をいただきながら現状を把握・認識したうえで、奈良県の子ども読書活動を推進していきたいと考えている。それぞれの立場で現状把握・認識するための意見があればいただきたい。

(4) 子どもの読書活動を推進するための取組の報告と情報交換

奈良県教育委員会事務局学ぶ力はぐくみ課長 熊谷 啓子 委員

学ぶ力はぐくみ課からは、「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙における、県内の児童生徒の読書に関わる状況等を紹介する。「読書は好きですか。」の質問項目に「当てはまる」と回答した児童生徒の奈良県と全国の割合は、前回調査が行われた平成31年度と比較すると、奈良県では、小学校で2.5ポイント低下し（全国小学校は2.5ポイント低下）、中学校で0.7ポイント低下している（全国中学校は1.2ポイント低下）。「1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか。」という質問項目に対して、「10分以上」と回答した児童生徒の奈良県と全国の割合は、小学校は、令和3年度と比べ、1.8ポイント低下し、全国平均より3.2ポイント低い状況。中学校は、0.5ポイント上昇しているが、全国平均より、8.5ポイント低い状況となっている。全国と比較して、「全くしない」と回答した児童生徒の割合が高い。

令和4年度全国学力・学習状況調査における奈良県の児童生徒質問紙の回答状況と各教科の平均正答率とのクロス集計では、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか」という質問について、小・中学校ともに、「全くしない」と回答した児童生徒の全ての教科における平均正答率が一番低くなっている。また、「読書は好きですか」という質問については、小・中学校ともに「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高く、「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低くなっている。

学ぶ力はぐくみ課では、読書習慣などと学力との関わりについても分析の視点におきながら、本年度の全国学力・学習状況調査の分析を進めている。今後は、児童生徒の読書離れに対して、児童生徒の読書環境である学校図書館の整備と児童生徒の読書体験の機会の設定や学習における工夫等、司書教諭や学校司書をはじめとする関係者を対象とした研修の充実を進めていきたいと考えている。

奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課長 山内 祐司 委員

現状としては、高校対象の具体的な事業組みはできていない。具体的な活動については学校、協議会、研究会

で取り組んでいる。施策的な面では、現在第6次の国の整備計画が進んでいる。ただ、財源は地方交付税であり、目的が決められたものではない。どこまで予算を獲得して各学校に回していけるかというのが教育委員会の仕事だと思っている。その点について、この計画中に何らかの目途を立てなければならない。もう一つは、昨年の会議でも電子書籍の話が話題に挙がったが、文部科学省の子供の読書活動推進に関する有識者会議でもICTとのベストミックスという話が出てきた。いよいよ新年度に県の時期計画を見通す中で、電子図書で書籍というのをどう捉えるかという点で態度を決めなければならない。その点の研究を進めなければならないと考えている。

奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課長代理 清水 孝則 主幹

人権・地域教育課では、地域における読書活動推進、また子どもが本と出会うきっかけづくりを担う人材の育成に主眼をおいて、県立図書情報館との共催で読書講座を行っている。資料5には、令和3年度までの子ども読書推進講座を示している。昨年度12月から1月にかけて、「子どもの発達段階に応じた読書活動講座」を乳幼児期向け、小学校低学年向け、小学校高学年向けに分けて、図書情報館の交流ホールで開催した。講師に和歌山県の藤田直子先生を招いて、本の読み聞かせの実演、子どもが自ら本を手取るための仕掛けについての講義、受講者同士の絵本の紹介や情報交換を行う交流の時間を設定した。地域や学校で読み聞かせを行っているボランティア、図書館司書、保育士、小学校の先生、地域教育関係者など全3回で54名が受講した。アンケートでは受講者の満足度は100%だった。発達段階に応じた読書活動という切り口で始めた講座であり、本年度も同じような形で開催する。今年度は小学校を一つの講座とし、新たに中学校、高校向けの講座を設け、全3回で開催する。中学校、高校も読書離れが進んでいるので、読書文化の醸成に力を入れたい。幼少期からそれぞれの段階に応じて大人ができる仕掛けや読書、国語力について考える講座を11月22日、12月2日、1月13日の計3回、開催する。

奈良県立図書情報館副館長 井ノ上 晶 委員

今年度の取組を紹介する。まず、ティーン世代を対象とした図書コーナーの設置と資料展示の事業を行っている。当館は2階と3階に図書館機能があるが、3階にヤングアダルトコーナーを設け、ティーン向けの名作や「なるにはBOOKS」、「15歳の寺子屋」といったシリーズ本を常設している。例年、夏休みに図書展示という形でイベントをしており、今年は、「夏のとも2022 背のび本で出会う夏」と名付け、一般書に近い書籍を「背のび本」として展示している。展示本は借りることもでき、中には、「ケーキの切れない非行少年たち」など、一時期話題になった書籍もある。ティーンが読むには難しいかもしれないが、読書によって知ることの喜びを感じられるような本を集めている。「平和・戦争・国際交流」などのテーマを設け、「アンネの日記」や「夜ふけに読みたい動物たちのグリム童話」など国内外の本を展示するとともに、令和4年の課題図書も集め、7月30日から9月末まで開催している。次に、平成23年3月からこども読書力向上事業として、図書館未設置地域への絵本・読み物セットの貸し出しを実施している。地域の公民館や教育委員会を窓口として、図書館がない町村、小規模図書館や町村の小・中学校に対し、本を直接搬送している。また、平成22年度から学校読書活動支援事業として、県内の高等学校を対象に生徒や教職員の方々のニーズに応じて資料を届ける事業も実施している。県内の市町村と協力しながら、子ども達のニーズに答えている。なお、当館で「こども図書室」という事業を実施してきたが、現在は、コロナ禍の関係で実施できていない。当館は、専門書や大人の方が読む本、学生では大学生以上の方が読むような本が多く、なかなか子どもにアプローチ出来ていないが、ヤングアダルトコーナーなどを通して、少しずつでも子どもが読書に親しむ手伝いをしていきたい。

奈良県学校図書館協議会 高等学校図書館研究会代表 奈良県立法隆寺国際高等学校長 上田 精也 委員

本日の資料として昨年度末に完成した『会誌』をお配りした。この2年、コロナの影響で学校図書館活動が制約を受けている。そのような中で、昨年度はテーマをICTデジタル化実践とし、各校の取組をまとめた。啓発活動が中心とはなるが、例えば、デジタル化をした中でのおすすめ図書やイベントの紹介、電子黒板や電子掲示板を利用する形、図書館の利用について動画を作成して図書館利用を促すという取組があった。ここには掲載されていないが、校外からスマートフォンなどを通して自校の蔵書を検索、予約ができる環境整備を行っている学校もある。手続きすれば期間限定だが、無料で使うことができる蔵書検索サイトがあり、県内の高等学校でも6校が取り入れている。コロナの影響でICT環境が劇的に進んでいる。この研究は、図書館情報研究委員会が進めている。ここに掲載できていない読書推進研究委員会でも研究を進めている。ビブリオバトルや読書会、様々なイベントの企画と情報交換を行っている。学校司書部会は、高等学校の読書活動推進の中心となる学校司書の情報交換の場とスキルアップの場である。部会や研修会をそれぞれ年間3回は実施し、普段からも情報交換している。高校生に薦めたい本を学校司書が出し合って、それを共有する中で生徒に紹介するなどしている。

奈良県学校図書館協議会 小中学校図書館研究会代表 香芝市立真美ヶ丘西小学校長 浅井 信成 会長

小中学校図書館研究会では、児童生徒の読書活動、本に親しむことを推進してきている。コロナ禍の影響でなかなか集まって話し合いができていないが、書面やオンラインで代表が話し合い、今年度は、研究の主題を「読書力を鍛え、生涯学習の基盤を作る学校図書館」として研究を進めている。サブテーマを「子どもの主体的・対話的で深い学びの支援に向けて」として各校で研究している。昨今、研究会でも公共図書館や様々な組織と連携しながら、子ども達が本に親しむための取組を進めている。本研究では、協議会と協力して読書感想文、読書感想画の審査をしている。本年度も課題図書や自由図書の応募から一次審査、二次審査をし、2月に表彰式を行う予定である。毎日新聞社と共催し、表彰をしている。昨年度はコロナ禍のため開催できなかったが、本年度は開催したい。表彰式の後は、読書感想文画集を作成し、各校に配布する。他にも研修として、読書の指導のスキルアップ、読み聞かせやパネルシアターの研究を行っている。

奈良県都市教育長協議会代表 桜井市教育委員会教育長 上田 陽一 委員

読書活動については、朝の読書タイムの設定、図書委員やボランティアの効果的な活用が挙げられる。読書タイムは、以前は1日の授業を受ける姿勢づくりや1時間目の授業を引き継いで受けるための位置付けだったが、より読み取る力を付ける読書タイムという位置付けに変わってきた。本市には地域のボランティアの団体があり、学校にも積極的に来ていただいている。今はコロナ禍であり、図書室の整理、本の整理、修理を行っていただいている。本市は、図書館司書の配置はしていない。五條市が市立図書館の指定管理を行っている聞いた。本市も管理の契約の中で学校への司書の派遣を進めたいと考えている。現在の契約が令和5年度までのため、令和6年度から学校への司書の派遣の内容を入れた契約を検討している。本市は子供読書活動推進計画が策定されていないが、本年度中に完成する予定である。また、今年度中に新しいシステムに入れ替え、市立図書館の蔵書の管理の電子化を進めている。

学校の図書室の活用面では、新聞の配置も課題になっている。本市は半数の学校しか図書室に新聞を配置していない。配置している学校でも図書室に置いてあるだけでは、タイミングよく読めないということで職員室又は職員室の前に新聞を配置し、子ども達が声をかけて読むという体制を取っている。小学校では1紙、中学校では2紙置くように予算立てしている。GIGAスクール推進によってWi-Fiの整備が行われたが、図書室にはWi-Fiを入れていない。図書室は静かに本を手にとって読む場所であると共通理解し、児童生徒にも伝えた。読み取る力や聞く力が学力の向上には必要不可欠なものであると強く思っているので、これらを進めていきたい。

奈良県町村教育長会代表 川西町教育委員会教育長 橋本 宗和 委員

川西町は去年のオリンピック・パラリンピックのホストタウンとして、プエルトリコと交流をしてきている。プエルトリコの選手がパラリンピックに出場したときには、学校や地域の人達で、オンラインで応援することができた。大会後も交流が続き、昨年度末には、プエルトリコの学校と川西小学校の児童がオンラインで交流した。また、川西町の子どもたちが絵本を作って、日本からその絵本をプエルトリコに送るといった交流もできた。

川西町立図書館には125,000冊の蔵書があり、児童書はそのうち40,000冊である。川西町は観世流「能」発祥の地で、観阿弥・世阿弥にまつわる本がたくさんある。世阿弥が残した言葉に「初心忘るべからず」があり、『風姿花伝』や『花鏡』の中には、「初心忘るべからず」について、三つの大事なことを伝えている。一つは「是非の初心忘るべからず」。二つ目は「時々の初心忘るべからず」。三つ目は「老後の初心忘るべからず」である。このように公共図書館は、地域の特色ある情報が入手できるとも大事なところである。

川西町は読書推進計画を平成17年より作成し、毎年それに係る会議を行っている。本町の子ども読書推進計画の基本方針としては3点。1点目は、子どもの読書環境を整える。2点目は、幼稚園から中学校まで一貫した読書教育システムを構築する。3点目は、各機関の連携を図る。

公共図書館の取組内容としては、2歳児、3歳児の年齢毎に対する絵本の読み聞かせ、わらべ歌の紹介等を開催している。また、4歳から小学1年生、小学2年生から中学生への絵本や詩の紹介および読み聞かせをしている。親子への絵本の読み聞かせ、親子のためのお話会、大人のための絵本講座等の開催もしている。また、幼・保、小・中学校と図書館連携を大事にしている。図書館の本を幼小中(団体)へ貸し出し、より身近な場所で様々な本に触れる機会を作っている。幼・保との連携では、町内の園児を図書館に招き、本の紹介や読み聞かせを行っている。小学校との連携では、全学年にブックガイドを配布し、小学3年生を対象に図書館見学を実施している。中学校との連携では、家庭科の授業を通して生徒に絵本の語り手実習を行った。中学生は手作り絵本を制作し、小学生に読み聞かせをするという活動をしたり、図書館で中学生が職場体験学習をしたりしている。町の保健センターとの連携では、子育て支援アプリでママ・パパ教室を開催したり、子どもの4ヶ月検診時に参加している両親に読み聞かせを行ったり、絵本の重要性について説明や紹介を丁寧に行っている。子育て支援センターにおいては、親子で参加した子どもたちに絵本の読み聞かせをしている。地域団体との連携では、町内で活動を行っている川西お話会のメンバーに対する語り手講座の実施や、図書館活動への協力連携も行っている。

教育委員会では、子育て団体と協賛で川西スマイルフェスタを実施している。絵本の広場を作ったり、絵本作家の長谷川義史さんに来ていただき、絵本ライブも開催できた。実際に長谷川さんが舞台上で絵をかいたり、自分の本の紹介をしたり、子どもも大人も楽しむことができた。作家が自分で書いた本を読み聞かせるというのは、本当に素晴らしいと感じた。他にも、本に触れ合う機会を増やすための方策として、図書館にある本を利用した工作教室や図書福袋の配布などを行っている。

また、図書館での仕事を紹介し、親しみをもってもらうことを目的とした、図書館司書の仕事の紹介や体験教室も行っている。テーマ別に期間限定の展示も図書館で行っており、今はSDGs特集をしている。

図書館の取組の一端を、資料「思考力を高める川西の教育-保・幼・小・中・図書館連携-」に掲載しているのでご一読いただきたい。そして、機会があれば、川西町の図書館にも来ていただきたい。

民間団体ボランティア代表 奈良子どもの本連絡会 西村 君江 委員

奈良子どもの本連絡会なこれんの通信、「なこれん通信」と「図書館とまちづくり」の会報を中心に近況報告をしたい。奈良子どもの本連絡会は様々な地域のお話グループや個人で活動をしている方、文庫活動をされている方などが会員である。講演会、研修等、「子ども達との本の架け橋になる」ということが目的で様々な取組を行っている。ここ2年はコロナ禍で報告が減っており、図書館のお話を休止しているところもある。川西町の話

聞いて、コロナ禍と思えないほど活発に取り組まれているのに驚き、敬服した。

なこれんの活動ではオンラインで交流し合うことが増えてきた。第 25 回おはなしネットワークは田原本で開催され、26 グループ 40 名が各地域から 1 人限定で集まって勉強をした。参加者はそれをもち帰り地域の子も達に返していくことに取り組んでいる。田島誠三×今森光彦対談は、絵本からのメッセージ実行委員会の「子ども夢基金」を使った取組である。50 周年記念講演会では、「めくるよるこび 絵本・子ども・大人」広松由希子さんをお招きして講演会をした。対面で 70 名ほど参加があった。広松由希子さんは、ちひろ美術館の学芸部長で、神戸の大谷記念美術館で毎年行われるボローニャ国際絵本原画展の審査員もされている。同じく国際審査員を務めておられるブラティスラヴァ世界絵本原画展についても奈良県立美術館が 3 年に 1 回くらい招致しており、この際に奈良子どもの本連絡会も協力をしている。奈良子どもの本連絡会は本年度 3 月 31 日を以て閉会することが決まっている。会報はそれまで発行する。

「図書館とまちづくり」は地域の情報を拾い、街づくりの中での図書館の存在意義、地域の子も達が大切であるという視点を外さないように 2 ヶ月に 1 回会報を出している。三宅町の複合施設「MiMo (みいも)」。ワークショップやプロジェクト会議を開いて創られた施設の担当者に記事を依頼した際には、図書室を主点に置いた原稿をいただき巻頭言に掲載した「MiMo (みいも)」はいろんなものが融合されていて、とても充実した施設である。また、橿原高校の書店クラブの部長である生徒にも記事を依頼した。橿原高校の 3 つの取組として、1. 三洋堂書店橿原神宮店でポップを作る。2. おすすめの本のアンケートをとる。3. 本のポスターを作って紹介するという活動をしているとのことであった。さらに、図書館と書店がタッグを組んだスタンプラリーの取組や、読書カードのプレゼント企画があった。

学校司書については、目的は適正だが休暇や退職金など処遇に問題があり、改善すべき課題がある。奈良県ではビブリオバトルの広がりを見せている。平群町の ICT については、学校司書とおはなしの会が協力して読み聞かせの動画を作成した。絵本の画像を撮ってから、音声を入力した。また、公民館教室で子どものためのプログラミング教室を行っている。子ども達とともに、我々も学んでいかなければならない。

学識経験者 奈良教育大学教授 柵橋 尚子 委員

大学生の問題点として、文章を最初から最後まで読めていない現状がある。例えば、課題を出しても、条件を最後まで読まずに提出することがある。昨年度、本委員であった横山真貴子教授の資料にある令和 3 年の国立青少年教育振興機構の調査では、紙媒体の方が電子媒体よりも認知においては優位であるという結果が示されている。電子媒体で見ている情報は透過光であるため、記憶の定着が紙媒体よりも低いということである。読書というものは基本的には紙媒体であるものであると考え。私自身は、紙で読書をする子ども達に育ててほしいと考えている。私は子どもの頃、本を読むことが本当に楽しかった記憶がある。最近は YouTube の動画などがあり、内容を動画で知ることができるが、やはり本を読むことの意義は大きいので、本を読む子どもを育てたい。

10 年以上前の取組ではあるが、愛知県のある学校では、学級担任全員が毎日子ども達に 20 分の読み聞かせをしていた。物語の蓄積が多い子どもは、本を読む子どもに育つ。その学校では、読み聞かせだけではなく、ブックトークをすることもあった。ブックトークの後、関連した図書を子どもに紹介すると、子ども達には率先して関連した本を読む姿が見られた。この取組は、教員の読書経験や読書指導力の向上にも資するものである。

フィンランドの視察を 2 回したが、「物語の袋」という取組があり、子ども達が主体的に本に関わる工夫がされていた。大学の授業でも取り入れたいが、カリキュラムの関係で難しい。フィンランドの学校図書館は、本を探ること自体を楽しむことのできる構造であった。図書館司書と連携して、授業ができるような体制が必要である。教科書に読書の項目があるが、紙面構成を工夫して子ども達が読書を楽しめるようにしてほしい。県で独自の読書の副読本を作って本の楽しさを啓蒙したり、本の日を生かして県下で一斉読書をしたりする取組ができればよい。

(意見) 小学校でもここ数年不読率が高い傾向がある。研究会や図書館教育を含めて、国語科の先生と共に一緒に授業の中で読書率を高めていくような取組をしている。本校では、低学年で絵本に親しませている。高学年では学習のために読書をする傾向が出てきたが、物語や小説を読むというところまでは至っていない。今後、作者の思いに触れられるような読書に向けて声かけをしていきたい。

(意見) スマートフォンの普及によって、動画というものが大きな要素になっている。例えば、県立高校ではオープンスクールを対面だけではなく、e-オープンスクールと銘打って、県内全学校が動画を通して中学生に案内している。

(意見) 棚橋先生の「物語の袋」について、平群北小学校は研究実践で「物語の箱」を作られていた。フィンランドのように袋を利用すると面積が広い絵を描くのによいと感じた。

(意見) イギリスでは、学校がワールドブックデーや読書週間に子ども達が自分の好きな本のキャラクターになりきった服装で学校へ登校してくるという取組がある。

(意見) 電子媒体の文字と紙媒体の文字では引っ掛かりが違うという話があった。電子黒板が入って板書の時間が短縮できるし、子ども達の教科書もデジタル化ということで動いている。将来的にどうなるのか。もしかして再びノートに文字を書き、黒板に文字を書くことが見直されているかも知れない。こういったことが今後研究されていくのではないか。子どもの生きていく力を育てていくというのが根本で、その核となる部分を勉強しながら子どもにとって一番いい方法を見つけていく必要がある。

(意見) 造園をやっていた時に山田登美男氏に世界一と感じる作品を見せてもらった。中間のものではなく、よいものを見て、よいものを聞く。芸術の世界ではそれが大切だとおっしゃっていた。子ども達に大変よい文章を見せたり、聞かせたりすることが大事で、そうすれば何が悪いかわかるとおっしゃっていた。図書館でも学校でも、いろんな立場で、いろんな場所で、そういうものを見せ、聞かせていくことが大事だろうと思う。3歳までにどれだけ言葉掛けをもらったかで、その子の一生の言葉の数が変わると、ある先生から聞いた。いろんな言葉を掛けてもらった子ども達はしっかりと自分のことを言える。これが大事だと思う。いろんな立場で、いろんな角度で奈良県の子ども達のために考え、手を差し伸べていただければと思う。